二十六人一首

麦湖翁書

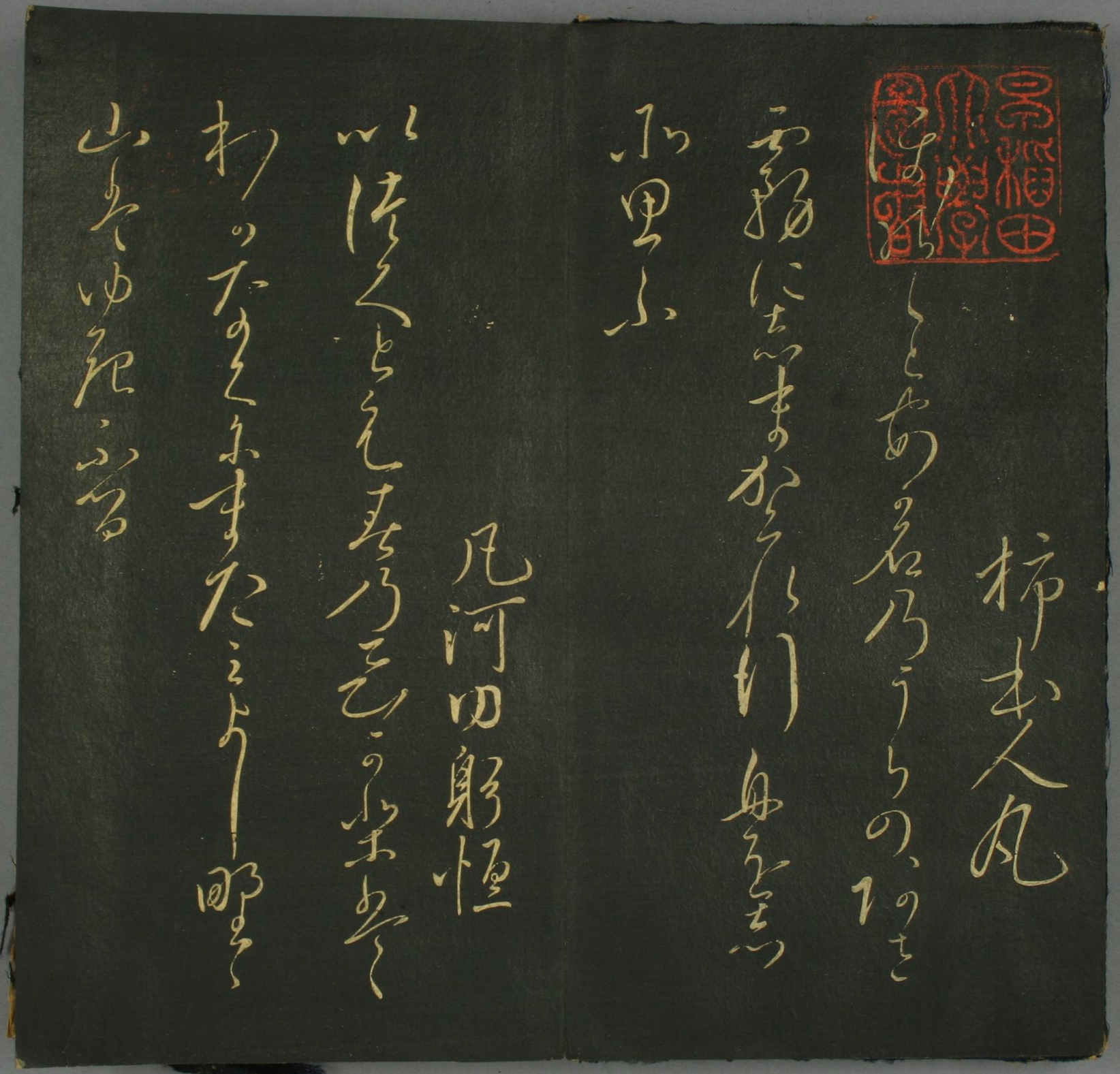
全

へ4
4401

昭和二年十二月十三日
高田昌平寄贈

門へ4
號 4401
卷

4
4401



柿本人丸

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に
しまかくれゆく舟をしぞおもふ

小野小町

花の色は
うつりにけりないたづらに
わが身よにふるながめせしまに

凡河内躬恒

白雲の
たえまにみゆる
山桜
ちりぬるかぜ
なりけりと
しらくもの
たえまにみゆる
山ざくら
ちりぬるかぜ
なりけりと

大伴家持

さゝ竹しつはおのれ時あれはなをうつくしと思へる

葉はきよりまいらんとしるまておも

ひしらるゝ乃西

在原業平

代の中小さき事をなん思ふ時

なつかしき人乃ありさまを見ては

乃とけ一ふらん海し

素性

吹ちらすやまかぜにこそはまかせめ
なのこりなくはるのやまもと
吹ちらすやまかぜのこそはまかせめ

孫九大夫

ゆきこそはこのもかのもにふりしかど
ゆきのうちにはるのきにけり
ゆきのうちにはるのきにけり

ことの葉や　藤原為相

天つ空　ゆきかよふらん　雲の波

ふきまどひぬる　秋風の色

藤原敦忠

逢見てし　ものの思ひ　乙一種

布袋　秋月　松月

藤原朝忠

なのりそ人をたえて志るべ
しらなき波の来しより

藤原高光

五重塔の九見遠
ゆ月りなの

源公忠

遊覽やうて山陰の川
霞ふかすえにこゝ淵のまゝ
ほゝ一さり

高倉宮女御子

とゝの孫小弁の君の歌つかまつる
ら無ひに為ひ為ひてとゝまるこゝ
ろ人

そゝ戈弁

時葉の秋の夕暮

源宗于

雲井なる月の光をかりそめに
ながめ捨てし山の端の月

藤原敦忠

あふ事をいとかりそめにしのぶ山
見るかひなくもなりにけるかな

藤原朝忠

春日にて折る人を見る野べの色の
小まつ原の雪しらぬ法師
まさるらん

藤原清正

雨をつゝみしるひとよをまつ
たゝの時こそ松はなりけり

藤原興風

折しなれば乃友

坂上是則

春の日の光にあたる桜花
なぞ散るらむ心しなくは

小大君

いにしへの奈良の都の八重桜
けふ九重に匂ひぬるかな

平忠盛朝臣

大中臣能宣

ちとせまつ　ときの　ちぎりは
　　きみ　ぞ　ゆ　ふ　ま　ち　ける
　　ゆ　く　す　ゑ　の　ち　よ　に　て
　　ま　つ　の　ち　よ　を　か　な　ら　ん

平兼盛

かぜふかぬ　なみたちさわぐ　ひさかたの
　　ひかりのどけき　はるのひに
　　なぞ　ゆ　ふ　ま　ち　ま　ち　て　ま　し
　　ち　と　せ　の　ま　つ　の　こ　ゑ　か　な

紀貫之

ながれてはいもせの山の中をゆき
ちかひをかけしかみのしるしあり

伊勢

みるめなきわが身をうらとしらでのみ
海人の釣舟はてしなきものを
こがれつつ

山邊赤人

初の秋しらつゆ志ろ乃み乎

ゆふ乃ゆ乃なかあ可ら

ゆふつ乃なまとら乃

遍照

末の世ゆ乃ゆ乃ゆ乃

世中の村くも

ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃

絶友則

遠ちかたにかすみはのこるなり
川霧すなわちかすみなり
なるべしや

小野小町

以前見参に持ち侍りしかの
老世なりしかの
所の里計り

春雨に濡れて出でぬ
ものなれば
山霧立ちそめ
ぬ

中務

秋風の吹くにつけても
草ならぬ身は
なにとか
思はぬ

如の数東毋なよいりえふ舟
春日野をゆきもとゝまるこゝろ
まつのをたちなもむ

一条忠見

大中臣頼基

ふ社無くて仕へまつれ一よ
思ふよ後世をも

一節ちよよなこと来ふ仕

源重之

よしの山見わたすのーしら雪ハ
ふるとも花ぞ春ハ
まさりける

源信明

恋ひてさ小夜ふけぬれば
あらぬ人ぞ恋ひしき
よこ見ぬ月ぞ

源順

ここにのみ秋の来ぬるかなしさは
雲居ふ社まこよりそ秋はきた
ひかの雁ぞ鳴

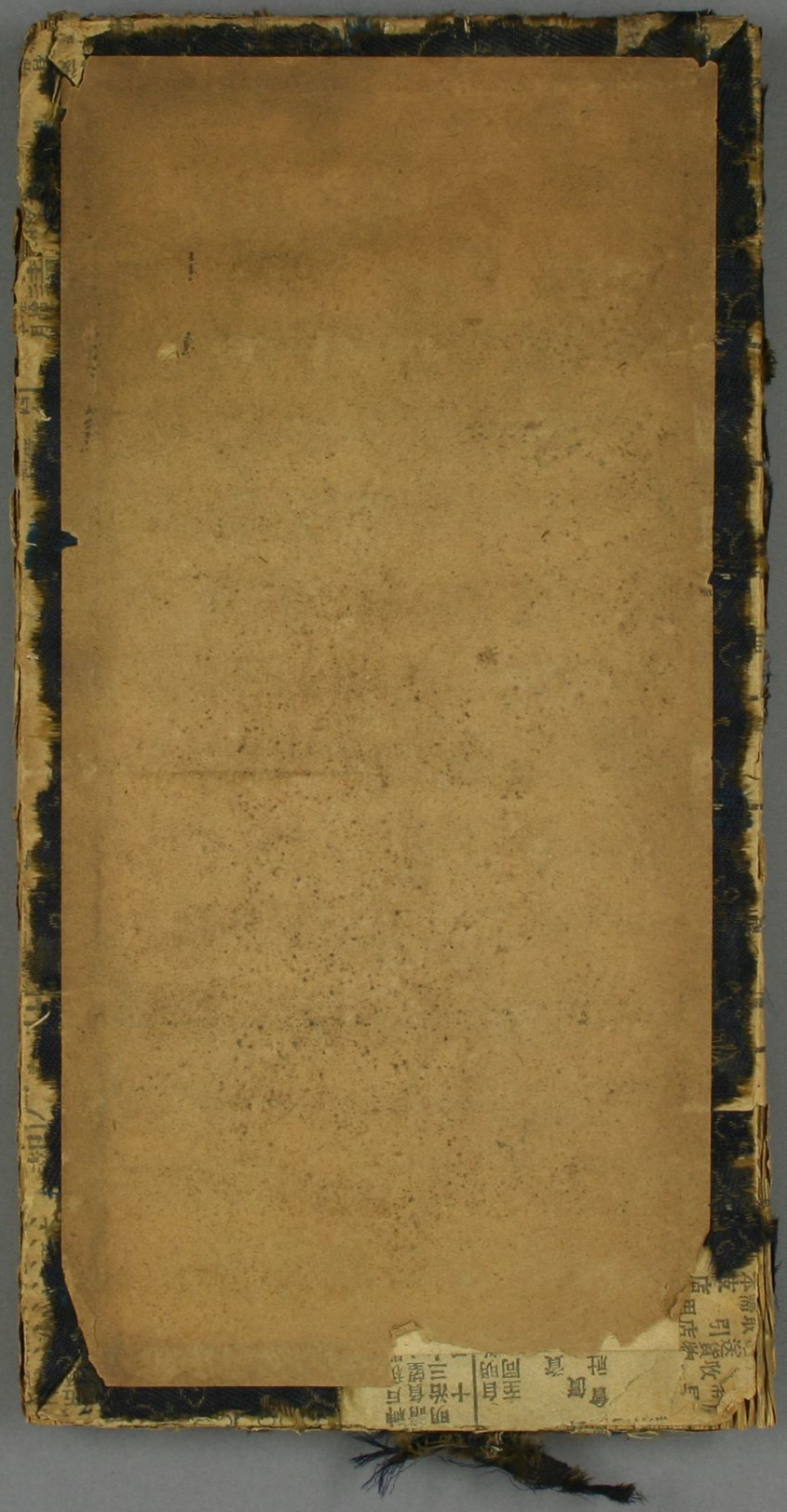
清原元輔

秋ぎりは立ちまよ我
かりそめふ花の移なの一夏う
ぞ志ぞ形の月れ

藤原元真

おくやまの松の葉ごしに見てし
梅花をぞ折てかざしつる

前原仲文

有明の月にぞ見しかぬれぬ
おもふ人のよりの乃ぶたる九月廿日に
今こそ知

辛酉十二月十日の夜燈下
書六十五老人崇大任